

ミュージック・コンクレート  
電子音楽  
オーディション

日本楽器のすぐれた電気技術による

ヤマハ Hi-Fi プレーヤー



**日本楽器**

東京支店 銀座7 TEL. 57.5691

音楽が音を出さなくなってしまうからすでに久しい時が過ぎている。

ミュージック・コンクレートも電子音楽もともにこうした無内容な音楽の骨組のなかで失われてしまった音の純粹性、音響のエネルギーを戻そうとするものである。それはいままでの一さいの装飾をすてて、人間の生々しい呼吸をサウンド（伝える）するものとしたい。ミュージック・コンクレート、電子音楽とは、従来の音楽が陥ち込んでいた慣習と模倣とマニエリスムを徹底的に排する。

そして、いままで誰も踏み入れることのなかつた新しい音響の世界に生命力を探究しつづけるものである。鉄道ダイヤのように直線の交叉する作曲コンテ図表のなかから、いま新しい宇宙がひらけようとしているのである。

「ミュージック・コンクレート＝電子音楽」第一回オーディションをひらくにあたり、NHK、文化放送、新日本放送、ラジオ九州の各放送局、日本楽器、東京通信工業の各社ならびに各方面の方々が寄せられた絶大なご援助に対しては深く感謝する次第である。これらの方々のご援助がなくしては、このオーディションも大へん困難なものであつたらう。

実験工房

# PROGRAM

- |                  |   |                       |
|------------------|---|-----------------------|
| I                | マイクロフォンのための音楽<br>music for microphone<br>(1952)                                       | 芥川也寸志<br>Y. Akutagawa |
| II               | ミュージック・コンクレートのための作品 x, y, z<br>Les œuvres pour musique concrète x, y, z<br>(1953)     | 黛敏郎<br>T. Mayuzumi    |
| III              | ミュージック・コンクレート「レリーフ・スタティック」<br>musique concrète "Relief Statique"<br>(1955)            | 武満徹<br>T. Takemitsu   |
| VI               | オートスタイド作品 "試験飛行家 W・S 氏の眼の冒険"<br>adventure of eyes of mr. W. S, a Test-Pilot<br>(1953) | 鈴木博義<br>H. Suzuki     |
| — intermission — |   |                       |
| V                | 立体放送のためのミュージック・コンクレート<br>musique concrète en sonore stéréophonique<br>(1955)          | 柴田南雄<br>M. Shibata    |
| IV               | 電子音楽<br>Electronic music (1955)   | 黛敏郎<br>T. Mayuzumi    |

I 素数の比系列による正弦波の音楽

II 素数の比系列による変調波の音楽

III 矩形波と鋸歯状波によるインヴェンション

## 新しい音楽

岡本太郎

新鮮なおどろきのない芸術なんて、無意味だ。  
今日の大部分の音楽が退屈なのは、まだまだきまりきった楽器と、約束された旋律の範囲に限られているからだ。

ミュージック・コンクレートや電子音楽などについて、とかく人はいいとか悪いとか、音楽であるとかないとか言う。しかしそんなことはどうだつていい。

それよりも、ズバリとふれてみることだ。そして驚き、心を躍らせ、生き甲斐を感じとりたい。われわれは驚きと希望のために生れて来ているのだと、少くとも私は思っている。ところでその生きるアカシを創り上げるのは、実はわれわれなのである。

アカデミックな値段表を拒みつい、あらゆる無理解と愚劣の中で、毅然とたたかい、常に明朗に日本の音楽界に希望と驚異の旋風をもたらす、逞しい青年群のこの発表会を、私は心から期待し祝福する。



芥川也寸志  
Yasushi AKUTAGAWA

マイクロフォンのための音楽 (1952)  
music for microphon

NHK製作  
演奏時間：約7分

私には今更こんな古いものを持ち出そうという気持はさらさらございません。それにも拘らず、このテープがプログラムに加えることになりましたのは、この会を計画なさった方々があんまり御親切で、あんまり御熱心で、あんまり御真剣であつたのと、それをまげてお断り申し上げるのが大変心苦しかつたからでございます。

私はいつもこの様に新しい芸術をあつくことなく追求される方々を心から尊敬いたしますし、自分もなれることならそうなりたいたいものと常日頃思っている次第でございます。

それにしましてもこのテープを作りましたのはもういつだつたか思い出せない位昔のことでございます。たしか五年程前のこと、NHKの御厚意で「音楽のアトリエ」という30分の番組をやらせて頂きいろいろなテープのイタズラやらおしやべりやらをいたしました時に、一つの材料として作ったものでございます。まことにお恥しいものでございます。

(三人の会会員)

黛敏郎

Toshiro Mayuzumi

ミュージック・コンクレート

のための作品 x, y, z

Les œuvres pour Musique Concrète x, y, z

初演：1953年11月27日(文化放送)

演奏時間：x=5'10"

y=4'26"

z=3'36"

電子音楽

Electroic Music

- i 素数の比系列による正弦波の音楽  
Music for Sine wave by proportion of prime number
- ii 素数の比系列による変調波の音楽  
Music for Modulated wave by proportion of prime number
- iii 矩形波と鋸歯状波によるインヴェンション  
Invention for Square Wave Saw-tooth Wave

初演：1955年11月27日(NHK)

演奏時間：i=4'01"

ii=5'29"

iii=3'49"

1952年5月、パリの Salle Gaveau で開かれた Musique Concrète 世界最初の公開演奏会は、私の音響的人生を根本から変改させるほどの強い衝撃を与えた。

マテリアル

便宜的な素材の規定や演奏能力の限界に阻まれることのない、芸術家の自由な理の飛翔を、われわれはどれほど渴望していたことだろう。

メカニズムによる、嘗て存在しなかつた新しい音響像の追究——それは全く新しい宇宙、別



な次元に於ける思考を意味する。

そして、技術が無機質化すればするほど、創作家の精神の純粹さ、感性の豊かさ、直感の鋭さに対する要求は際限なく増すのだ。

これは、Musique Concrète がその発想の根源に人間の非合理性を持ち、電子音楽が数学の原理に基づき抽象性を持つということの蓋こそあれこれらの新しい音楽が芸術であるために、共に等しく課せられねばならぬ条件なのだ。

機械は、人間が人間的であるより更に人間的であり得る。

(三人の会会員)



## 武満 徹

Toru TAKEMITSU

ミュージック・コンクレート

「レリーフ・スタティック」(1955)

durée total 6' 20"

僕らをして執拗に生えおもむかせる力、うたわせ、愛させる力を信じたい。今日、僕らが音楽のルールとして有つものはもはや生きることには無縁である。

詩集の扉に記るされた、愛という言葉は、私が体内に感じとつた愛であるか、彼の愛であるか。生に密着した言葉は観念的な意味づけによつて、本来の生命を失つてしまつている。

或る時、人間は、音楽を詩を宗教を、未分化の總体として有つていた。それは、今日、芸術以前といわれる状態である。が、それは、生の挙動そのものであつた。私は、曖昧なルールの裡に溺死している音に、その原始的な生命感を回復したい。

(実験工房会員)

## 鈴木博義

Hiroyoshi SUZUKI

オートステイド作品

「試験飛行家 W. S. 氏の眼の冒険」  
adventure of eyes of mr. W. S, a Test-pilot

製作・東京通信工業  
durée total 9'



写真(左より)美術構成者山口勝弘、作曲家、鈴木博義

この作品は、実験工房の協同製作の一つとして、1953年に、山口勝弘氏が美術およびナレーションを、私が音楽を担当して製作したもので、その年の秋に、一度発表しました。

音響的素材としては、製作当時の色々な条件から、ほとんど、ピアノにだけ限られています。しかし、この制約は、私にとって、それほど不満なものとは思えませんでした。私は、ピアノが提供する音響を、まったく初歩的なものではありましたが「録音テープの技術」の助を借りながら、そ

れを素材として利用しようと思つたからです。

この作品の製作ののち、私の関心は、今日、一般に電子音楽と呼ばれる領域に向けられてきました。この新しく開かれた音響的領域に見出される可能性は、まったく素晴らしいものです。しかし、この領域は、多分、人間にとつての、途方もない賭なのかも知れませんが。

(実験工房会員)

# 柴田南雄

Minao SHIBATA

## 立体放送のための

### ミュージック・コンクレート

Musique concrète  
en sonore stéréo  
-phonique

演奏時間 20分  
NHK製作



昨秋11月27日の立体音楽堂の時間にNHKから放送されたものである。先在する具体音を造型芸術でのオブジェのように扱って構成していくのがミュージック・コンクレートの純粹な行き方であろうが、私は構想から出発して要求する音を探し求め、変形し、あるいは創り出して、音楽形式に従って当てはめて行つた。全体は次の四部分から成る変奏曲形式である。

主題——14個の打楽器による。短いプロローグで2—1—5—3—1.5—0.5の基本拍節が显示される。第1部に入ると4部音符の基本リズムの上に音色の显示が三つのグループに分れて行われる。第2部は力と速度と立体感（方向感）显示の部分で、終り近くに細かい音符が跳ね廻る箇所がある。最後に短いエピローグがつく。

第1変奏——自然音のみで構成した。形式は主題と全く同一。水滴、水流、波、星のまたたきの音など。

第2変奏——生物の音のみによつた。形式は前と同一。鳥、動物、虫、人間（無意識に発する音声のみ）等。第一部の基本リズムには人間の心臓の音を用いた。

第3変奏——機械音のみによつた。形式は同前。基本リズムは時計のセコンド音が刻み、種々の摩擦音、打撃音爆発音、回転音等が用いられている。曲尾では星のまたたきとセコンド音と心音とによつて時空の無限大と人間の有限とを対比させたが、それ以外全体を通じて具体音は何等内容的な意味を持つものではない。

（新聲会会員）